社　会　科

社会科の教科構造と方法的仮説

（総　　論）

織田長繁　高森　充　都築　亨
加藤佳孝　児嶋文寿

1.　その基本的ねらい

前年度の紀要でわれわれは中学1年の「地理」と「歴史」とを関連づけ「日本の国土と歴史」の学習内容をどのように関係させて学習させることができるか，また高校での限られた時間的制約の中で，「地理」「歴史」をどのように構成したらよいか，同様に中学3年の公民的分野の構成原理を究明すべく試案を，上にのせてきた。

1つには，学習指導要領の改訂期にあたって，現実に即応した新らしい「社会科」をわれわれなりにつくり出したいという野心もあったのであるが，今一方には，教育課程の改訂されたなかで，社会科への時間的しわよせ（高校ではそれまでの17単位時間が，48年度からは15時間となる）を内容の面でどのようにカバーするかという極めて現実的な対応策を考えねばならぬという世俗的な下心があったのである。

教科構造の問題はしかし，内容の排列や教材内容の取捨選択だけではすまされない問題である。今までのわれわれのこの問題へのアプローチの姿勢の中に方法の問題が欠落し，あるいは意識的に方法主義を排してきたことはなかっただろうか。方法抜きの教科内容論に偏ってはいなかったか。

われわれは経験主義の立場を金科玉条とするものでもなく，問題解決学習のもっていた誤まりをくり返す気はないが，にもかかわらず，高校の教育内容がその方法論的裏付けを欠落させたままで構築されたとき，末梢的知識の集積に堕すことにならないかと危惧するのである。

一体社会科とは何を学習させ，教科の目標として何をねらえばよいのか，公民教育ということで，文教政策の下請けとしての教化知識的指向を増大させたものが社会なのか，社会科学性という名のもとに，政治学や経済学の学問的体系をストレートに高校・中学の教科内容に移行させ，歴史教育の内容に20年以前から系統主義をそのままかかえこんでいてよいものだろうか。社会科に限らず国語など文科系諸教科についても同じことがいえると思うのだけれど，相もかわらぬ古典的知識や漢文の量だけを抱えこんで，それを即教科性と一人合点している向きがないであろうか。

われわれの共通の意識としては，そうしたなかば常識ということでうけつぎ抱えこんできた教科性という怪物にメスをあてながら，本当に社会科教育がねらうべき目標をさぐりあて，そこから最小限の内容を抽出することである。

2.　当面の方法論的試行

昨年までのわれわれの関心は，度々紀要にも報告してきたように中学，高校を通じての「社会科」の教科構造をつくろうということであった。そして6カ年の社会科にふり向けられた時間を最も有効に使って教科の骨ぐみ，その中での科目（分野）の関連性，その内容配列を再構成することであった。

それをもう少し思い切って根本から掘りくずし，再構成したらと思い立ったのは，51年度から大学の入試科目の選択の仕方も変わるだろうし，高校の入試について愛知県が社会科を受験科目からはずしたこともあって（本校ではまだ本年は5教科）かなり自由にできるという客観条件が出かけてきたからであり，現在の受験体制下の社会科に〝ゆきづまり〟を感じてきたからである。

昨年の付連社会科部会で報告された，東京大学附属の〝総合社会〟やお茶の水付属の〝現代社会〟の構想をわれわれも正しいて考えているし，何らかの形で，そうした〝社会科的なもの〟が現在の教育に導入されないとすると，とくに高校は，大学入試向単位認定所になってしまうであろう。

われわれの専門の相違と関心領域の差から，必らずしも社会科で統一した方法をもっていないが，

Ⅰ　生徒が主体的に学習できる地理の学習方法（地理）
Ⅱ　公民的指向に対立する社会科学的教科性の内容および方法についての検討（政経）
Ⅲ　主題学習の方法（日本史）
Ⅳ　世界史の構造と範例的方法（世界史）
Ⅴ　教科への導入の試み（倫社）

来年度はとにかく以上の視点から社会科の方法論を模索し，最も有効な指導法を確立してゆきたいと考えている。